

「動き」による音楽の知覚・感受が、音楽学習に果たす役割

所属校：文京区立駕籠町小学校

氏名：吉見 美奈子

派遣先：東京学芸大学大学院

キーワード：知覚・感受・「動き」・共通事項・記述

研究の目的

本研究は、小学校における音楽学習の中で、「動き」による音楽の知覚・感受が果たす役割がどのようなものなのかを明らかにすることを目的とする。

研究の方法

1 文献研究

まず、美学的な考察と脳科学的な考察から知見と示唆を得た。それらを踏まえて、学習指導要領における音楽の知覚・感受がどのように位置付けられていたのかを整理し、本研究における「音楽学習における音楽の知覚・感受」を定義した。

次に、「動き」による知覚・感受を取り入れた音楽教育と、昭和26年学習指導要領(試案)「リズム反応」の指導内容を分析し、実際の音楽学習において起こる様々な「動き」による知覚・感受について整理した。

2 授業研究

まず、小学校の全学年における授業実践の中で設定した「動き」による音楽の知覚・感受の場面と指導内容との関連性を整理し、第3学年、第5学年において、「動き」による知覚・感受の活動を支えとして、表現活動へと発展させた実践を行った。

次に、「動き」で知覚した音楽の構造的な側面(音楽を特徴付ける要素)と感受した感性的な側面(音楽を特徴付ける要素がももし出すよさや特質)の記述を基に自分の表現方法を工夫する活動を設定した題材を分析・考察した。

3 調査研究

児童の学習経験を基にした意識調査の結果を分析し、「動き」による知覚・感受の経験が児童にとってどのような意味をもっているのかを考察した。

研究の結果

1 文献研究からの考察

(1) 表現活動を支える「動き」による知覚・感受

本研究では「動き」を、音楽を直接的に身体で表す「動き」や、記憶されている「動き」の経験と音楽の動きとを、自分の中で関連付け記述や発言で表す過程における行為ととらえる。「動き」によって音や音楽を知覚し、よさや特質を感受する活動は、すべての音

楽活動を支えるものとなる。音楽学習の導入で、このような音楽の知覚・感受の活動が適切に設定されることによって、児童は次の段階における表現や鑑賞の活動で自ら思考・判断するための手がかりを得ることができる。また、様々な聴取の経験を通して自分の内部に知覚・感受され、再構成されたものを、「音楽表現」「動き」「言葉」などに置き換え、外的な世界へ表すことによって、児童は自分の音を吟味したり友達とのコミュニケーションを通して表現をより深めたりすることができる。

(2) 指導内容を明確にした音楽学習

音楽学習において能動的な知覚・感受が起こるような学習活動を設定するためには、その時間に児童が意識を向けて学習する内容、すなわち指導内容を明確にして行うことが大切である。指導内容が明確になった音楽学習では、児童がその時間に知覚・感受するべく設定された音楽の構造的な側面に意識を向けて知覚し、そこからかもし出されるよさや特質などの感性的な側面を感受するという行為が起こるのである。

これらの考え方を踏まえて、本研究における「音楽学習における音楽の知覚・感受」を、「指導内容が明確になった音楽学習の中で、児童が共通に音楽の構造的な側面を知覚し、そこから自分なりによさや特質を感じ取ること。」であるとした。

(3) 「動き」の要素の分類

「動き」の要素を「聴取時」「表現活動」「鑑賞活動」に分けて分類した。この結果、音楽学習における「動き」による知覚・感受を取り入れた音楽学習は、音楽を特徴付ける要素の知覚から楽曲全体の表象にまで音楽の理解を深めるために大変有効であるとした。

また、「動き」による知覚・感受を取り入れた音楽学習の経験は、中学校や高等学校における音楽科・芸術科(音楽)の学習活動において、記憶されている「動き」の経験と、音楽の動きとを自分の中で関連付けることにより、生徒が根拠をもって自分なりに音楽を批評する力の育成にもつながっていくのであるとした。

2 授業研究からの考察

(1) 「動き」による知覚・感受を取り入れた音楽学習

「給食のメニューでリズムをつくろう」

ア 「動き」による知覚・感受の有効性

児童は、鑑賞曲を「動き」によって知覚・感受することにより、集中して音楽を聴取することができた。また、音楽がもつ時間の動きと能動的な身体の「動き」とが一体化され、より明確に音の序列や音と音のまとまりを知覚することができた。

また、音楽のもつよさや特質を身体の諸感覚を通して経験できるという意味でも、学習の導入段階で「動き」による音楽の知覚・感受を設定することは有効であることが分かった。

「組曲をつくろう」

ア 音楽の「動き」と児童の「動き」との関連

楽曲によって適切な「動き」があるということが分かった。また、児童の音楽をとらえる筋肉感覚の状況によっては、音楽を拍で取るのではなくまとまりの中に身体を委ねるような「動き」が出る場合もあるということが明らかになった。

イ 表現活動を支える「動き」による知覚・感受

「動き」による知覚・感受は、音楽学習における表現活動の支えとなるものであり、音楽の構造的な側面と感性的な側面とを、音楽と直結した身体で直観的につかむことができるという意味で非常に有効であるということが分かった。

(2) 「動き」から発展する音楽学習

「曲想の変化を感じ取ろう」(第5学年)

ア 「動き」による知覚・感受から記述への発展

児童の記述及び表現から、児童は指導内容を「動き」による知覚・感受で確認し、その経験を支えとして表現に生かしたり音楽について客観的に分析したりすることができるということが分かった。このことから「動き」による知覚・感受によって経験した音や音楽の構造的な側面や感性的な側面について言葉で置き換える活動は有効であったと考える。

意識調査

児童の記述の中には、音楽を動きながら聴く活動について、その時間に学ぶ指導内容の知覚・感受がしやすいという回答が多かった。この他には、表現活動の中で「動き」による知覚・感受の経験が生かされるということも記述されていた。このように、「動き」による音楽の知覚・感受はその後続く多様な表現活動へ音楽学習を展開していくための支えとなることが分かった。

考察

1 「共通事項」と「動き」による音楽の知覚・感受

中央教育審議会(答申)では、音楽科教育における指導内容の改善を「小・中学校においては、音楽に関する用語や記号を音楽活動と関連付けながら理解することなど表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を【共通事項】として示し、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する。」としている。

音楽の構造的な側面については、ほぼ同じように知覚することができるものの、音楽の感性的な側面の感受については、一人一人が異なった意識の中で音楽を感受するため、感受するよさや特質の内容は一人一人が異なる。音楽と児童の意識とが結び付くためには、児童の身体が音楽と直結し応答できるようになっていなければならない。そのために、身体と直結した「動き」による音楽の知覚・感受を手段とするのが有効である。このことから「動き」による知覚・感受は、「共通事項」の指導方法として適切であると考えられる。

2 「動き」による知覚・感受から広がる音楽学習

音楽学習は「動き」による知覚・感受を支えとして、様々な表現活動や鑑賞活動に発展する。

鑑賞活動であれば、音楽の構造的な側面と感性的な側面を「動き」で知覚・感受した後、発話や記述による学習活動が展開できる。内的な聴取力を働かせる場面では、「動き」による音楽経験を通した音楽の記憶が「時間」「空間」「エネルギー」をもった動きとして鮮やかによみがえるのである。

また、表現活動には、その過程において、自分と音楽とが応答するための「動き」、表現を高めるための「動き」、表現している自分自身の状況を確認するための「動き」等が存在している。表現活動において「動き」による知覚・感受を設定することによって、児童は時間の流れに沿って動く構造的な側面である音楽の動きに身を委ねながら、音楽がもつ様々な構成要素や表現要素を知覚・感受し、表現意欲を高めていく。

このように、「動き」による知覚・感受は、音楽学習において音楽の構造的な側面を知覚するだけでなく構造的な側面がかもし出す雰囲気やイメージ、よさや特質などの感性的な側面を音楽と身体との直接的な応答によって感受するための手段である。また、「動き」によって音や音楽を知覚し、よさや特質を感受した経験は、児童に経験として記憶され、表現活動の支えとなる。このような経験を踏まえ、思考・判断しながら音楽活動をすることができるような音楽学習を教師が設定することにより、自分の思いを音楽で表現できる児童が育成されるのである。